

はじめにかえて

―「養和」の飢饉の大量死―

唐突で申し訳ありませんが、十二世紀も終わろうとしている、そんな頃の京都の町に思いを馳せていただきたいのです。どんな時代かと言いますと、まさに「平家物語」の時代、平清盛は病死し、京都の町は、飢饉や疫病、大火、辻風と、相次ぐ自然災害に見る影もなく荒れ果てていました。

こんな忌まわしい時代に区切りをつけようと、元号が「養和」と改元されました。しかし、悲惨な様相は好転する気配もなく、「春、夏、雨が全く降らなかつたと思うと、秋には大風や洪水など、よくないことが打ち続き、五穀はことごとく稔らず、春に耕し、夏に植える営みも空しく、秋の収穫はまったく望めないありさまです。このため民は郷を逃げだし、あるいは家を捨てて山に住まいするありさま。さまざまの祈祷、さまざま

ざまな方法が行われましたが、よくなる兆しとてありません。

京に住む者にとっては、何ごとにつけても、田舎こそが頼みだというのに、絶えて上るものもなければ、いつまでも平気な顔でいられるものでもありません。念じるような思いで、さまざまの財物を捨てるような値で食べ物に換えようとはしますが、それとて顧みる人もなく、たまたま交換しようとする者も、金を軽くし、粟を重くするありさま。都は今や、路には乞食があふれ、憂へ悲しむ声がそこかしこに充ち満ちております。

前の年は、このようにして辛うじて暮れました。あくる年には立ち直るかと思っておりましたが、あまつさへ疫病まで発生し、よくなるどころか、その惨状は目も当てられません。

世の人びとは、ただ飢え死ぬのを待つばかり。かと思うと、笠を着け、よい身なりをした者が、足を引きひき、ひたすら家ごとに乞い歩くありさまです。

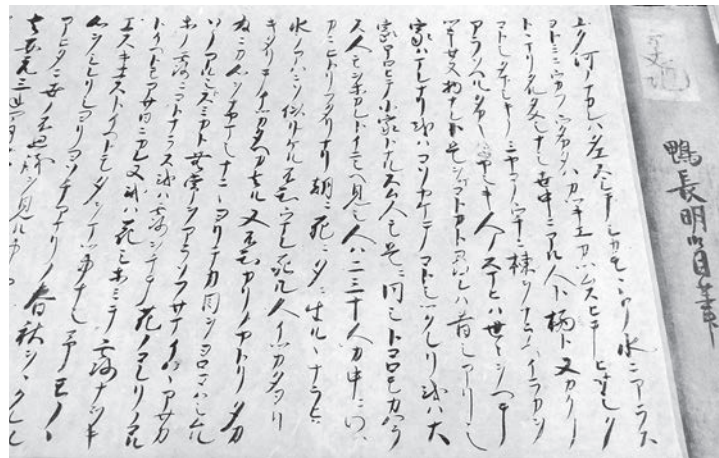
また道には、惚けたような人々が、歩くかと思えば、すなはち倒れ、そのまま死んでまいります。このようにして築地や道のほとりには飢え死んだ人々が捨て置かれ、



仁和寺五重塔に架けられた「阿」字の額

ち上がった僧侶たちで、^き飢餓や疫病に死んでいく人々を哀れみ、せめてもの供養にと、^{ほんじ}屍の額に凡字の「阿」字を記し、^あ仏と死者との^{けちえん}結縁を取り持とうとしたのです。

その回った範囲は、「京のうち、一条よりは南、九条よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東の路のほとり」とありますから、京の市街地域、「洛中」という区域に該当します。現代の地域で言えば、北は一条通り（一条戻り橋の通り）から南は九条通り（東寺南側の通り）までの南北約五キロメートル、西は千本通り（JR山陰本線二条駅東側の通り）から東は寺町通り（寺町電化店街の通り）までの東西約二・五キロメートルの範囲を、四月、

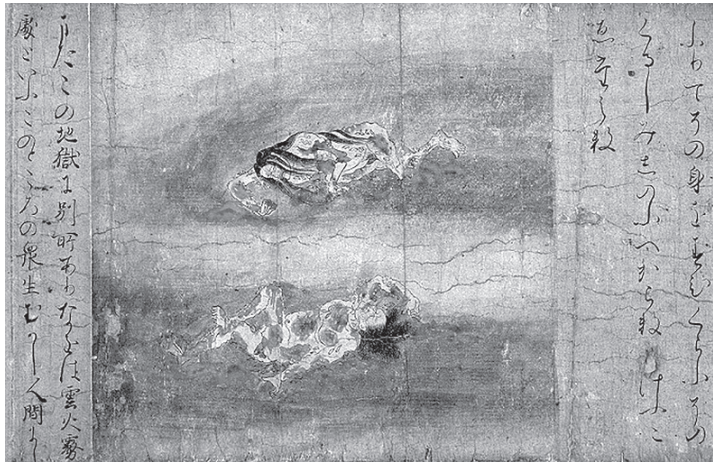


鴨長明自筆「方丈記」下鴨神社河合社蔵

数も知れぬありさま。取り片づける者としてなく、都には死臭が充ち満ち、^{しかばね}屍の変わりゆくさまは目も当てられず、まして河原などは、馬車の行き交う道もないありさまです。

これは鴨長明の「方丈記」の一節を、思いっきり意識したのですが、そんな京の都を徘徊する異様な僧侶の団がありました。鼻と口を布で覆い、屍を見つけては、のぞき込むように、その額に何やら文字を書いておられます。その横では別の僧が、その数を記しているのでしょうか、何やら記帳している様子であり、こんな組み合わせが、都のあちこちらに出没しておりました。

彼らは、仁和寺の僧・^{りゅうせう}隆暁の呼びかけに立



地獄草紙 (東京国立博物館蔵)

飢饉などの異常事態に直面したとき、この境界線が崩れてしまいます。人々は、おぞましい「死」の様相と直接に直面することになります。生きている人間が、直接に感じられる「死後」とは、つまりは、死後の変わり果てた人々の様子ではないでしょうか。日本で最初に「死後の世界」を文章化したのは「古事記」だと思われます。イザナギ、イザナミの国生み神話を思い出してください。妻のイザナミは「火の神」を生みだし大やけどを負い、それがもとで死んでしまいます。夫・イザナギは妻のことが忘れられず、黄泉の世界、つまり死後の世界へ

五月の二ヶ月間、屍しかばねと格闘しながら歩き回ったこととなります。

その「阿」字を記した屍は、実に「四万二千三百余り」となり、中には腐乱した死骸や、犬に喰われた死骸もあるでしょうし、その死骸に顔を寄せ、震える手でその額に筆を走らせていた様子を想像するだけで、鬼気迫るものを感じ、身体中の震えが止まらなくなります。

いきなり凄惨な話になりましたが、敢えてこの時代の記憶から話を始めましたのは、この時の「大量死」の記憶が、日本人の「死後の世界観」に大きな影響を与えていると思われるからなのです。

この同じ時代に、「地獄草子」や「餓鬼草子」が生まれるのですが、そこに描かれたおぞましい世界は、この養和の飢饉の惨状を写し取ったものであり、死後の世界のおぞましい姿を我々の心に焼きつけてしまいました。

ところで、死後の世界と言っても、死んで帰った人はいないわけで、死後の世界がどうかを具体的に知ることはできません。人間は、「死」と「生」を線引きするため、葬送の儀式を考え出したわけですが、平和なときは良いのですが、戦乱や自然災害、

妻・イザナミを探しに行くというお話です。

イザナミを黄泉の国で見つけ出したイザナギは、

「おまえがいなくて、さみしくて仕方がないよ。一緒につくろうといった日本の国だった、まだ出来てないじゃないか。一緒に帰ろうよ！」

しかしイザナミは、「私は、黄泉の国の食べ物を食べてしまった後なので、もう地上へは帰れない」と言うのです。それでもあきらめようとしないう夫の熱意に動かされ、

「では、黄泉の国の神に相談してまいります。その間、決して館へは入らないと約束してください」と、夫・イザナギをその場に残し館の中へと消えていきます。

しかし待てど暮らせど妻は戻ってまいりません。心配になったイザナギは、「入ってはいけない」と言われていた神殿の中へ足を踏み入れてしまいます。

そこには腐り果て、蛆うじが湧いたおぞましい妻の姿がありました。

恋い慕っていた思いは、一瞬に恐怖心と嫌悪心に変わり、イザナギは這々の体で逃げだします。自分のおぞましい姿を見られたイザナミは、怒りに駆られ、「見るなど言つたのに、なぜ見たッ！」と、夫を追いかけます。

何とか逃げ切ったイザナギは「死」と「生」の境界を「千引きの石」という大石でふさいだうえで、死後の世界は汚けがらわしいと、「禊みそぎ」をして、汚れを祓はらおうとします。

この禊みそぎの中で、左目を洗ったときに生まれたのが「天照大神あまてらすおおかみ」、右目を洗ったときに生まれたのが「月読命つづよのみこと」、そして鼻を洗ったときに生まれたのが「素戔嗚尊すさのおのみこと」というわけです。日本の国家神「アマテラス」は、死の汚れを祓う過程で生まれた神サマであり、日本神話は、まさに「生と死」の狭間はざまから生まれてきたということです。

閑話休題それほさておき、このように生きた人間から見た死後の世界は、おぞましい穢けがれそのものだったわけです。京都に「鳥部野とりべの」や「化野あだしの」と呼ばれる場所がありますが、古来は、死体が捨てられた場所であり、積み重なり朽ちて異臭を放つ死体、あるいは木から吊つるされ鳥に啄つひまれていく死体の有り様が、人々の心に「死」を、おぞましいものとして定着させていきました。

また、私たちは、天変地異やあるいは戦乱による「大量死」「非業の死」を、いつの時代でも体験してきたと言えます。それが人間の歴史だと言っても過言ではないと思うのです。ちなみに、この養和ようわの飢饉うごみ以後を見ましても、一二三二年（鎌倉時代）

の寛喜の大飢饉では、各地の流民が京都に流れ込み、死人が道路に充満する有り様で「天下の人種三分の一失す」と言われ、さらに一四六一年、寛正の大飢饉では、全国的な飢饉となり、京都だけでも死者は八万二千人に達したといわれています。江戸幕府二五〇年の治政下にも「一六四二年、寛永の大飢饉」「一七三二年、享保の飢饉」「一七五六年、宝暦の飢饉」「一七八三年、天明の大飢饉」が発生していますし、ここに「台風」「噴火」「地震」「大火」「戦乱」と、私たちはその都度、大量死に遭遇し、そのおぞましい惨状を心に焼き付けてきました。

そこから、個人の記憶を超えて、人間という「種」の記憶として、「死」はおぞましいもの、望まないものとして捉えられるようになっていったのではないのでしょうか。

さて、この本ですが、死後の世界について「ある」とか「ない」とかを論じる本ではありません。結論から言ってしまうと、「人間」の命は、肉体を持った間だけをいうのでなく、肉体が亡くなった後も続いていく「意識」こそが人間だと結論づけておられます。

つまり「死後の世界」はあると断言しているわけです。

しかし、今ご紹介した日本における死の様相は、あくまで肉体を人間とした立場で捉えたものであり、その惨状から死後は忌まわしいものとされ、仏教やキリスト教、ゾロアスター教等々、宗教の導入によって「地獄」がイメージされ、対極として「極楽」がイメージされていったのだと思います。洋の東西で多少の違いはあっても、「死後の世界」とは、このように、生きている人間から見た「世界観」だと言って間違いないでしょう。ところが、この本では、人間の本質は「肉体」ではなく、「意識」だとしており、この立場から「死後」ということ、あるいは「死ぬ」ということを見直したとき、どんな世界が私たちの前に広がっていくかを考えようとしているのです。

そんなわけですから、「それは違うだろう」と思われる方は、ここから先は読まないのが賢明だというものです。その判断のためにも、この本の概略をここに示しておきますので、読むか読まないかの決心を付けてください。

まず第一章は、歴史マニアである私が、歴史を通して「死」の不安に苛まれ逃げ回る様の概略です。そして第二章は、田池留吉なる大阪府立高校の校長先生と出会うことで、不安の正体と向き合うようになる経緯を述べ、それでも残る「死後」への不安

の正体を「意識の流れ」という本を手掛かりに探ろうとし、具体的に自分の心と向き合う方法を提示していきます。

第三章では、趣を変え、現代物理学の最先端である量子力学が説く「死後の世界」を紹介し、科学が「人間の魂」を解明しつつある現状と、その理論に欠落している「負のエネルギー」の「プラスエネルギー」への転換、つまり自己供養についてを「ハメロフ博士への手紙」という形で語っていきます。

第四章では、「意識の流れ」が向かう「次元以行」という次のステージへの移行について思いを巡らせ、「意識の旅路」のあらましを語っております。

そして各章の幕間には、死について向き合おうとする、様々な方の思いをコラムとして紹介しています。

これが、この本「死ぬということ」の全体像ですが、もしタイトルに惹かれ、「はじめに」を読まずに買ってしまわれた方がおられましたら、災難にあつたと思い、最後までお付き合いのほどをお願いしたく存じます。

この災難では、死ぬことはありませんので……。

私が初めて死を意識したのは二歳の時でした。

当時、家族は仏教を積極的に信仰しており、住んでいた家には特設の仏壇があり、木製、金属製、陶器製、紙製(掛軸タイプ)の十数体の仏像等が並べられていました。

祖母や母が朝な夕なに水、茶、仏飯を上げ下げし、花瓶に花を飾り、般若心経その他を唱える姿を見ていた私は、死に興味を持ち、母や祖母に「死ぬってどういうこと？」と質問したように覚えています。

それに答えて、二人は、「歳を取ったら死ぬ。私たちのほうがお前より先に死ぬ」というようなことを言ったので、私が「じゃあ、私は、生まれる前はどこにいたの？」と聞くと、母が「分からんけど、死んだ後の世界と同じようなところかな？」と答えました。

私は母に「(その世界のことは) 覚えとらんか？」と聞くと、母は「誰も覚えとらんか」と答えました。

そこで私は、「死んだ後の世界=生まれる前の世界について、もしかしたら私は何か思い出せるかもしれない。だって、二年前のことだもの。記憶をさかのぼってみれば、母や祖母より簡単に思い出せるのではないか」と思い、二年前にいた場所について思い出そうとしてみました。

そうしたら、真っ暗闇が見えてきて、私の体というものではなく、底無しに広がる真っ暗闇に(なぜか後ろ向きに)吸い込まれそうになりました。

(次ページへ続く)